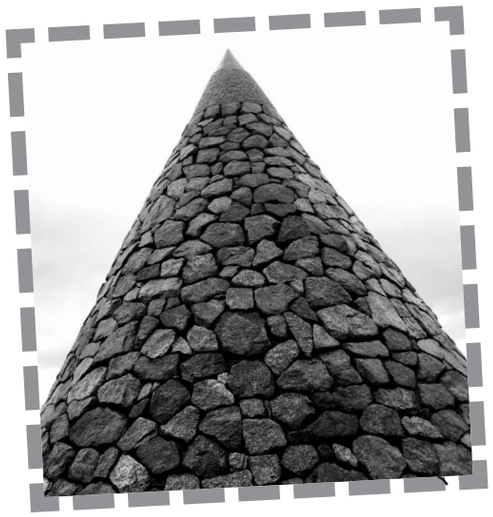
月　刊

Mélange

Vol.116



2016.09.25

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.116　2016.09.25
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」116 号　目次

詩 & 俳句

異出し ……富　哲世　03

海外詠(3) (俳句) ……岩脇リーベル豊美　04

しろじろと (俳句) ……高橋雅城　05

埃の噂 ……中嶋康雄　08

よすが ……大橋愛由等　09

わたしは慈悲のマカロニを　……中堂けいこ　10

ひがしひめじ……高谷和幸　11

しりとり連詩

しりとり連詩　瀬戸内紀行 2016 年夏……大橋愛由等／安西佐有理　6

連載エッセイ & 詩評

神戸詞あしび 105「吟行ならぬ即興詩を課した詩人の旅」……大橋愛由等　12

編集部だより★36／8 月は「ロルカ詩祭」があるために、「Mélange」例会は二か月ぶりの開催となる。9 月の下旬となって猛暑を生き抜いた実感が湧いてくる。8 月はトリエンナーレの瀬戸内国際美術祭に参加。参加詩人によって、「しりとり連詩」を交わした。詩人たちならではの「吟行」と言い得るも楽しい文学営為であった。さて、第 116 回例会は、詩人で文芸評論家の山田兼氏による「小散文詩　パリの憂鬱　シャルル・ボードレール」の翻訳・解説の資料をもとに話を聞く。これから秋が深まっていく。深い読書経験を積み重ねていきたいものだ。(大橋記)

◆異出し

富　哲世

幻出ししかも異なる成ることばかりにと、らわれていた硬骨魚の（ことばの）あたまは肥大して
不快な寒さに汗ばんだ朝食のプレートの脇で
クリーム色のゆかに並べおかれた鱶みどりのくすんだクロックスであったことに気づいた
それは同時に諺のようであり人形のようである過去に出自する片翼の見放された欲望であり
けれんが浅い朝の肌にいつまでも到達できない忌避すべきなにものかであったことは間違いない
それはあらかじめ失われた片割れであり一語ないし数語であり
しかも契約に基づいて場を占めようと不機嫌に重ねられようとしていたかつてはなみだをほどく
　ほどの塩の原で見交わす温情の暗合であったはずのものだ
それが母性に対象化されたエディプスの遺構であるとは信ずるに足りないが
そこではやはり悲劇的でなくはない〈欠如〉のキーワードがあって
そうだ夢の釣り場で
わしが釣り上げた方が大きかったと偽証する
自惚れがご破算にする
王の半睡の寝物語のなかで
ギッギッと古代を模して鳴く
釣り上げられた硬骨魚のあたまは食欲から見放され岸壁では搭乗機のように
存外柔らかく切り裂かれて
揺れていた

◆海外詠（3）

岩脇リーベル豊美

清貧の怒りも祈りも銃乱射
児生み祭もっと詩歌書いてたらと
紛らわしき比喩の深読みエール切るか
足止めて泉水掬う聖ネアンデルタール
清流魚わたしを死なせてわたしを生かせて
囚人の置手紙に文字違え行ってくるぬ

外国語話す天の舌凍てつくかき氷
森と海重ね近未来の淡水魚
白昼夢わたしを勿忘草かな
平泳ぎする人間水底碧き魚影
日の丸を背負い木枯らしになる柔道家
君はまだ木の子を探し続け森の怪獣
初恋の哲学者に似て立ち葵
処暑の宵サハラ熱風待ちぼうけ
パノラマの端っこ向日葵畑なれ
白杖のスピード変えず彼はたれに消える
一晩で湧き一晩で消え夢のあと
一晩で湧き一晩で消え秋の蠅

◆しろじろと

高橋雅城

夏から秋への不思議な旅です　二十句

空梅病棟は満室にあり鴨足草
鴨足草ときめく命また寿命
置薬売の訛や秋近し
台風の眼や万華鏡捨つるなり
縮む父縮む母へと夏土用
徹夜して脱稿するや朝の凪
遺言を書き直す父晩夏光
まむしとはいかん土用の鰻焼く
許嫁の顔しろじろと半夏生
今からはあなたの時代秋立ちぬ
戯れに机を洗いても無学
枇杷の種無縁仏にまで転げ
ピーマンの種ちらばりぬ男飯
晩年や八月に病む鬱心地
私小説ほどの句にして南蛮黍
あきらめの夏やカラオケ完コピー
あっちゃんのカラオケレモネードを片手
ラムネ玉転がる先へ家出妻
立秋や俯く青年にも届く
新妻は大がら昼寝するあたり

◆埃の噂

中嶋　康雄

埃まみれになってしまった
いろんなものにわからないものが住みつく
住んでも住んでも住み足りない
嫁に来て六十年以上が経った
いろんなものが
それ以上に住んでいるというのか
「畑のみみずにでもきてみな」
と突き放される
畑のミミズもてなずけた
朝の暗いうちから起き出して
畑仕事のかたわらに帰り損ねるミミズを
丁寧に道案内して帰してやった
ミミズに恩を売ったところで
翌朝鳥に食べられた
紫陽花の花は移り気で
桔梗の花は忘れっぽい
正月が明けると
餅を乾かしておかきをつくった
素焼きにして焦げ目がつくと
醤油を垂らしてまた焼いた
子どもたちは喜んだ
孫たちも喜んだ
ひ孫たちにも焼いてやった
少し口にするだけで
「ポテトチップスはないのか」
と言われてしまった
孫たちは婚期が遅れて
電子レンジの中で変なものでも生んだかと
不安になったが
新聞にそんなものだと書いてあった
下の広告欄には陰謀の本も宣伝されている
　から
陰謀かもと少し思ったりもする
宇宙人の話をしよう
雑草を暗くなるまで抜いていた
円盤からぞろぞろ宇宙人が降りてきて
柿の実を不思議そうに見ていたので
「甘いのはこちらだ」
と教えてやった
ひとつずつくれてやった
天国の兄さんが心配そうに見ていたので
兄さんにも
「ひとつ久しぶりに食うか」
と言ってやった
宇宙人が来てから
枯れてしまっていた百日紅の木が
また毎年狂ったように花を咲かせるように
　なった
団子みたいな蜂がまた集まるようになった
蜂のなかにキラキラ光る円盤も混じるよう
　になった
ご先祖さんの話をしよう
ご先祖さんは赤とんぼの背中に乗って
遊びに帰ってくる
だから赤とんぼをとってはいけないし
殺すのはもっとよくない
と子どもたちに言ってやった
だけど子どもたちは赤とんぼも
虫かごにいれたまま死なせていた
虫かごのご先祖さんはさぞ難儀したろう
そんなときは子どもたちに代わって
よくよく謝ってやった
来年のお供え物は奮発するからとも
向こうには内緒で言ってやった
ポテトチップスの好きな子たちの世代にな
　ると
目が届ききらなくなった
ご先祖さんの乗り物も目に見えない電子に
　なったりもした
もしかしたら謝りきらなかったのかもしれ
　ない
埃の噂をよくきくようになった
埃まみれのまんまにほったらかされて
ご先祖さんは今も迷っているという
せっかく家の便所に連れていってやっても
自動水洗だから
目をぱちくりさしている間に
どこぞの奈落に流されていく

◆よすが

大橋愛由等

その板から離れてくれませんか
（開演三分前だった。定まらぬ視線を塩水に満たされたコップに向け、わざと黒い髪飾りを落とす。「眉が上手く描けなかった」。猫足のふぁーにちゃーのどこかの抽斗にしまってあった志野焼の器はケソマンチェゴを盛るために残しておいていたことを忘れてしまったこと。川沿いの公園の樹木を素通りするはずが昨夜直撃してしまい多くの枝を折ってしまった半透明な風のこと。毎日決まった時間に決まった地所をながめているノネコの右耳しか残されていない石の記憶。アバニコを意味なく閉じたり開いたりして残り三分を過ごそうとしているその斜め前で「きのうの山麓の薄緑がきょうのさ緑を恪気している」。その板から離れてどこへ行こう。秋の雲を眺めているだけの日々では、わたしのくずれは止まらない。舞いも踊りも遠ざかってゆくのか。「カラーは？」と夢語りばかりするカルフォニア出身者は一日になんど欠伸をするのか考える、ぼんやりと。「あのね、あなたの夢は〈私〉ばかりでてくるのでしょ、知ってるの」。なんて悲しい〈私〉。いっそ板を反転させようか、形容動詞を剥奪しようか、それとも頬ずりしようか。

◆わたしは慈悲のマカロニを

中堂けいこ

固有のクインケ浮腫よ　くちびるの左半分がふっくら膨らむ
教会堂の入り口にはいつも白塗りの人が立ち　空き缶をさしだ
すのだ　天使のおつかいって　ただでは入れやしない　聖櫃の
かたわらにもたれる聖母子像がいまやネットで拡散した心霊ス
ポットになり　天使も賢人たちも大忙しでくちびるを膨らませ
あちこちから失恋少女たちがトランクをひきずってうす暗い堂
内になだれ込むのだが　空き缶はあいかわらずからっぽで銅銭
の臭みが血の予感を漲らせる　トランクの車輪が石畳につっか
かるきしんだ音に　あーそうだ　そうだったのか　わたしのナ
ビはビリービリーと固有を叫びながら迷路に満ちたこの世をす
っきりかんたん明瞭に一本の線描きにしてしまったのだ　あー
そうだと気づいたとき　空き缶の底にふくらんだ捻子のような
マカロニが音をたてて投げ入れられた　それはすでにそこのあ
ったかのようにいまさらの記憶をきれいに指し示してあった
このことを忘れないでいよう　ずっと

◆ひがしひめじ

高谷和幸

電車の殻からなる電車のみみに
４つのあしのままはけふしてかたらふとして
みみのイヤホンをたたれ
一つ目のあしのままはつまり死んだあとの日から０９の続きにある数字
は絶滅の生のなざし。二つ目のあしのままは虹彩のもえるあつさがあなた
であるならばそれは誰かのために用意されたはてのないしん(べ)だい(ッ
ド)の赤いのこり身でもよかった。(どこへつづくのか)、(ドアを開けよう
としていた)。三つ目のあしのままはうまれるまえから失敗したなざしだ
ったあたし。(窓から見えるひかるしょざいのもののなははやい速度でわ
すれられていた)。四つめのあしはゆらゆる黒い髪　(世界は決定されてし
まった)。
電車の殻にみたされた事後性のうみのあじけなさ(おのがおうじょうのく
るしみにひたいのひたり)。
椅子のいずまいのやわらかにまう少しづつのうごきが
町の影を垂直におとすひがんへ
ままは４つのあしをかけて
４つのあしのままはわたしを置いていく

愛由等

暗海へ出航しようとして
夜の寡黙にひれふすとき
あまたなコトバを刻んだ山と海の街から
閑かな船室の中でぼく・たちは
海を　越えること
抒情を越えること
の
区別がつかないまま
南への航跡に
身を委ねようとして

佐有理

手の触れそうな距離は実のところ
てんで見当もつかない速さで
転換する海・山を
鉄のにおいがわずかに混じる時刻
点在するあかりがデッキの向こうからさ
　しだし
照りつける（であろう）昼の太陽もまた
天の重さを暫時忘れようと、意外にも
てびろい雑魚寝の船室の隅
アイスクリームバーをほうばりながら
眠れない眠りをめざし

愛由等

しどけなくタラップを降り
ふきつけるこの風とこの風の異和
海と海に海を生きるひとびと
の鳥たちをみつめるまなざしの
ゆるやかに展開する島の光景
にはあんだるしあの夏の午後にも
漂うあの香り
フェデリコ・ガルシア・ロルカの鼻孔を
くすぐるあの香りが
ほんのりと

佐有理

滞ることなく移動して
泊まる宿の在りかを
どうにか思い出し、夏
とよばれる季節のひき潮時
遠回りして迷路を横切れば
扉を開くだけで
とうとうあの家の
どこかで見たような風呂場に
ふたつ先の島で立っているのを
ツバメらは気にとめず笑って飛びかう

愛由等

うかつにもそれは夏
うかつにもそれは唖蟬たちの
木々の片言のさざめきの中の
そっと集うひそやかな語り合い
山道の果てのなさと
木陰のさびしさが入り混じった
島の昼下がりの
ぼく・たちの歩行
それはきっと
水鳥が海面すれすれに
翔ぶその切迫に似て
あやうさと共にあり

佐有理

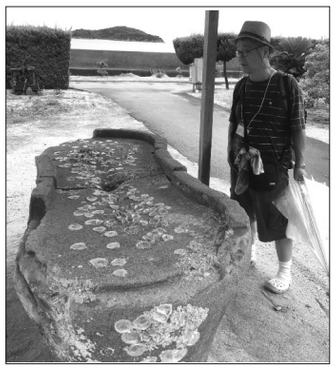
Ring, ring かすかな鈴の声に
理由を与えたくもなるのは、失った
リソウ的なワタクシアナタの言いぶんよ
りも
離隔した島々の時間にはこの
理不尽なほどの夏の道のりの記憶こそが
りきみもせずに合流し、
離岸する船の上から何度も
陸地をふりかえらなくても
またこの景色を訪れることを
今だけでも知っておきたかったから

神戸詞（うた）あしび

105-2016.09.25 大橋愛由等

吟行ならぬ即興詩を課した詩人の旅

さしずめ俳人同士の旅となれば、それはすなわち吟行となるであろう。日中さまざまな場所を訪れ、そこで感じたことを、のちに開かれる句会で俳句作品に昇華しなくてはいけない。このため俳人たちの旅は句会に向けた作品制作の準備時間として、気を抜く暇がない。



大島でかつて使われた解剖台
その傍らに立つ大西隆志氏

かたや詩人たちの旅は、吟行にあたる即吟を前提とする文学営為がないために、下手をすると漫然とした紀行に終わってしまうことがある。これではせっかく表現者ばかりで旅をしている意味もなかろうと、三年に一回開催される瀬戸内国際美術祭に参加する八月、旅をしている間ずっと連詩をすることを詩人たちに課してみようと思い立った。その提案を聞いた大西隆志氏は連詩をするなら「しりとり連詩」をしようと提案された。大西氏はかねてから「しりとり連詩」に深い興味を抱いていて、「ぼくは世界しりとり連詩協会の会長」と自称している。（ちなみに副会長は高谷和幸氏。わたしは事務局長をおおせつかったが、現在会員数は三人である）。

「しりとり連詩」のために、三冊のB5判ノートを用意した。それぞのノートは書く順番を異なるようにして、参加した六名が常にだれかが連詩を考え執筆している状態におこうと考えたのである。（実際は、ひとりに同時に三冊のノートが回ってくることが何度かあった）。

こうした旅の最中にも連詩を書くという即吟をかさねてきたために、ひとつの思わぬ効果が引き出されたのである。

「エクリの会」で訪れた瀬戸内国際美術祭は、三つの島をめぐってきた。神戸港第三突堤からフェリーに乗って深夜に出航して、早朝に高松港に到着したわれわれがまず向かったのが、大島である。美術祭の開催中、他の島同士は船の連絡網が発達しているが、この大島だけは、高松港との往復便しか設定されていない。この島はハンセン病の療養所があり、高松港と大島とは官営船が往復している。そしてこの島に入島を希望する者は美術祭事務局から整理券が発行され、官営船とは異なる釣り船に近い大きさの船で島に向かったのである。

大島につけば国際美術祭サポーターである「こえび隊」が迎えてくれ、島を案内してくれる。その親切で誠意あふれる説明にも感じ入ったが、案内してくれる場所と時間が設定され、帰りの船までも、指定されていた。

ぞろぞろと指定場所を歩くわれわれ。元患者の人たちと接することはなかったが、この島がもつ重い意味に、参加者は寡黙がちであった。かつては一度この島に患者として入島すると、二度と島から出ることは不可能であり、夫婦になっても子を産むことは禁じられ、はては死亡した後は解剖されることを強制されたのである。

大島に向かう船が出る前に、参加者にむかって私はひとつの提案をした。「この島に行って感じたことを〈しりとり連詩〉とは別に即興詩としてまとめてみてください」。

参加者はこうして吟行としての大島滞在を経て、男木島から高松港に向かう連絡船のなかで、即興詩をかきあげた。連詩を書き続けていたから、即興で書くことに対して準備ができていたのである。夕食の讃岐うどんを食べている店で、われわれはそそと即興詩を朗読したのであった。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.116
神戸

2016年09月25日　通巻116号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税込)